

日本中國學會報 第69集
2017年10月7日 発行 抜刷

学界展望 (文学)

緑川	英樹
道坂	昭廣
永田	知之
木津	祐子
平田	昌司

かがうことができる。

書誌については、高橋智『海を渡ってきた漢籍 江戸の書誌学入門』（日外アソシエーツ）を取り上げる。本書は漢籍書誌学を専門とする高橋氏が、江戸時代に存在した漢籍の扱いについて一般読者向けに紹介した書である。豊富な図版を使用して版本の相違を説明しており、非常にわかりやすい内容になっている。貴重な版本の研究のみならず、ごく普通に流通していた版本の研究がかえって当時の漢文文化の様相を知ることにつながるという指摘は有意義である。氏によれば、今も日本の公共図書館や大学図書館に江戸時代の古典籍が多く所蔵されているが、漢文文化が廃れてしまった現在、それらの古典籍が有効に利用されているとはいいがたい状況である。また、各地の漢文文化の拠点だった藩校が閉鎖されてその蔵書が散逸した影響で、蔵書収集の意図が不明になり、印記をたよりに類推する等の方法しかないとのことである。このような状況の中で長澤規矩也以来の書誌学の伝統を継ぐという意味において、本書は良きレファレンス書になっている。中国文献学を中心に執筆された氏の『書誌学のすすめ 中国の愛書文化に学ぶ』（東方書店、2010年）も併せて読まれることをお勧めする。（藤居岳人）

●文 学

はじめに

学界展望（文学）は、今後2年間にわたり、京都大学文学研究科中国語学中国文学研究室（代表：緑川英樹）が担当する。本稿で対象とするのは2016年1～12月に日本国内で刊行された中国文学の研究論著であり、学会ホームページ上に「単行本」と「論文」に分けて文献目録を掲載した。データ収集と入力作業については、中文研究室の山本浩史（教務補佐員）、楊維公（博士後期課程）両君の手を煩わした。ここに記して謝意を表す。

文献目録の分類は、以下のとおり。

1. 総記
2. 先秦
3. 漢・魏・晋・南北朝
4. 隋・唐・五代
5. 宋
6. 金・元・明
7. 清
8. 近現代
9. 日本漢文学
10. 比較文学
11. 書誌学
12. その他

従来は、「近現代」の次に「民間文学・習俗」の項目があったが、分類基準の曖昧さや刊行点数の少なさを考慮してこれを廃し、新たに「その他」を設けた。この改変には賛否両論あろうかと思うが、狭義の「文学」以外にも、歴史・音楽・美術・民俗など隣接領域の関連論著をなるべく幅広く収録することを意図したものである。ただし、映画やアニメーションなどの映像メディア、話劇などの舞台芸術に関する論著は、通例を踏襲して「近現代」の項目に入れた。いわゆる視覚文化やポップカルチャーに属するものが近現代文学と混在した状態となっているが、さりとて「その他」が肥大化するのも好ましくなく、今後、あるいは別の新たな分類方法を模索すべきかもしれない。

近年の中国文学研究は、専門がますます細分化してゆく一方で、複数の異なる学問領域に跨がり、相互にクロスオーバーするような成果も徐々に現れている。かくも広大か

つ多様な曠野にただ一人で立ち向かうのは至難の業であるゆえ、本稿では、京大内の信頼すべき同僚たち——道坂昭廣（人間・環境学研究科）、永田知之（人文科学研究科）、木津祐子（文学研究科）、平田昌司（文学研究科）各氏の協力を仰ぎ、緑川を含めた5名による分担執筆の体制をとった。以下、文献目録の分類にもとづき、項目ごとに担当した執筆者名を明記する（ただし、「先秦」「比較文学」「その他」は割愛）。原則として単行本を取り上げるという方針を共有したうえで、具体的な取捨選択や論評内容については執筆者各自の裁量に任せた。重要な論著にはなるべく言及するよう努めたが、それでもなお遺漏や偏向があるのではないかと恐れる。読者諸賢のご寛恕を乞う。

（緑川英樹）

一、総記

大規模データベースと電子テキスト（画像を含む）の普及により、学術研究の利便性が格段に増したことはあらためて言うまでもない。前者に関しては、金文京「中国古典文学研究と漢籍データベース検索」（『日本語学』9月号）が漢籍の電子検索を利用することの功罪、可能性と問題点について実例を挙げて論じ、研究・教育両面にわたり参考になる。電子検索に対しては、正確な読解力の低下を招くといった批判が多くなされるが、金氏がむしろ問題視するのは、中国の研究者や学生が『四庫全書』『中国基本古籍庫』などの大規模データベースを容易に利用できるのに比べ、日本の中国学においては必ずしも十全な環境が整っていないことである。財源の多寡に応じて、国内の大学間にもデジタル・デバイド（情報格差）が生まれており、「この現状を打破しなければ、日本の中国学はレベルダウンを避けられないであろう」と警鐘を鳴らす。ならば、どのような解決策がありうるのか。学会が主体となって契約し、会員がデータベースを共同利用するような方式は可能なのだろうか。

研究者にとっては、電子資源の恩恵を一方向的に蒙るだけでなく、みずから関連文献の電子テキストを作成し、公開・発信することもまた重要になるだろう。漢字文献情報処理研究会『論集：中国学と情報化』（好文出版）所収の二階堂善弘「電子テキストの発展とさらなる問題点」、千田大介「中国古典文献の電子テキストをめぐって 歴史・技術・評価」は、電子テキストの定本作成にともなう画像や字体の処理、OCRソフトの精度、文書構造のマークアップなどの問題をわかりやすく解説したものであり、コンピュータを苦手とする門外漢にとっても示唆に富む。

もちろん、テキストの電子化という波は、研究成果の発表媒体そのものにも多大な影響を及ぼさざるをえない。近年、学術論文の電子版公開が急速に進展しており、わざわざ図書館に赴いて原本をコピーせずとも、居ながらにして全文ダウンロードできることが多くなった。いささか極端な言い方をすれば、国立情報学研究所のCiNiiや中国知網のCNKI（中国期刊全文数拠庫）にオンラインで公開されていない論文は、たとえそれが重要な先行研究であっても、ほとんど存在しないに等しい、素通りされてしまう、という事態さえ起りかねない。先ごろ、「東洋学叢書」「中国学芸叢書」などで名高い創文社が2020年をもって解散すると報じられたのは斯界に大きな衝撃を与えたが、紙

媒体による学術出版は、今後ますます困難な路を歩むことを余儀なくされるだろう。

本来なら紙媒体で刊行されるべき価値のある著作が電子版で公開された例として、『匪石集—中島みどり遺稿—』（双楡書屋）を紹介したい。これは2001年に急逝した中島みどり氏の遺稿集であり、高橋和巳・郭沫若・楊絳・『列女伝』などに関する論説や訳注をまとめたもの。昨今の出版事情からして通常のかたちで世に問うのはなかなか難しく、PDF版を「颯風の会」ホームページ上に掲載するに至ったという。やむをえざる窮余の策であったにせよ、インターネットを使いさえすれば世界中の誰もが閲覧可能という点において、研究発信の新たなかたちを示すものではあろう。それにしても本書全体にみなぎる気迫、ことばの力強さは、なんと独特であることか。編者の中島長文氏は「頑張っている文章」（「跋」）であると率直に印象を語るけれども、少なくともアカデミックな砦に安住する類の文章とは異質の、決然たる迫力に圧倒されることは確かである。

齋藤希史『詩のトポス 人と場所をむすぶ漢詩の力』（平凡社）は、強いて言えば一般向けの書に属するのだろうが、上質なことばが文章となつてつむぎ出され、凡百の漢詩鑑賞とはまるで異なる彩りを放つ。「トポス」（topos）とは、もと西洋の修辭学用語。「あとがき」によれば、「詩が生まれる場所、詩が共有することば」という意味の二重性をこめてタイトルを決めたという。章ごとに洛陽・成都・金陵・洞庭・西湖・廬山・涼州・嶺南・江戸・長安を取り上げ、それぞれの場所に詩のことばが生まれ、集積し、編み直されてゆくさまを、著者は平静かつ洗練された筆致で解き明かす。

随処にさりげなく創見がちりばめられているのも心憎い。たとえば廬山の章。山中に遊ぶ慧遠の詩について「造物の理をそなえた山水に人心が呼応することこそ、理の発露である。しかもただ景物を眺めるだけではなく、険しい山に登るといった身体の動きをとまなうことで、より深く実現される」とするのに対し、陶淵明にとっての廬山は「あくまで自宅の南にある山、南山なのである。そこは、神仙の棲む山でも、仏道の聖地でもない」云々。本書は、作品そのものを精緻に読み解く過程を惜しみなく開示してくれる。専門家にとっても巻措くあたわざる魅力に満ちるが、むしろ願わくは次世代の読者が中国古典詩に親しむ際の良き指南役となつてほしい。

なお、「詩が生まれる場所、詩が共有することば」という齋藤氏の視座は、早稲田大学の松浦友久教授とその門下生の提唱した「詩跡」概念とも重なり合う。中国古典文学における「詩跡」とは、「詩歌に詠まれて著名になり、独特のイメージを喚起する、表現の核となる具体的な地名（場所）」の謂いであり、日本文学の歌枕や俳枕に似た役割を果たす詩語でもある。2015年に上梓された植木久行編『中国詩跡事典—漢詩の歌枕』（研文出版）は本文561頁＋索引57頁に及んで詳細を極め、12名の執筆陣による厳密な文献考証と実地調査に裏づけられた記述は信頼に足る。今後の研究の礎となる画期的な成果と言ってよい。

（緑川英樹）

二、漢・魏・晋・南北朝

漢魏晋南北朝の時期は、本年に刊行された著作から2点を紹介して展望に代えたい。

六朝樂府の會編著『隋書』音楽志訳注』（和泉書院）。初唐太宗の朝廷は、前代を総括し、南北それぞれの文化學術の整理と総括に熱心であった。『隋書』「音楽志」もその一つで、古代から隋朝までの樂制と樂律について記録している。

本書は、注釈が極めて周到である。言葉についてはもちろん、樂器や音階の解説、一覧表を用いて樂曲の名称の変遷を説明したりと、詳細かつ様々な工夫が施されている。それぞれの問題に対する先行研究についても目配りがなされており、読ませる注釈となっている。この注釈によって、専門を異にする者も理解が容易となる。訳文は、例えば樂人の服装なども平易で想像しやすい言葉になっている一方で、注釈において出典とともにその訳文の根拠が示されている。既に訳注のある「経籍志」とともに、訳注者たちの期待通り、中国文学ばかりでなく様々な分野で活用されることになると思われる。

ところで、本書は、各段落に見出しが附されている。前史にあたる第一段を除き、すべての段が各王朝の宮廷音楽と題され、その下に具体的な内容を示す小題が付く形式である。「音楽志」という性質上、宮廷における樂曲制度の紹介が話題の中心となるが、逆にこの時期にあつては宮廷が文化の保存、改革の中心地であり、また文化の発信地であったことがわかる。

序の第一行、まさに巻頭に「中国古典詩の歴史を一言でいえば、歌から音楽が消失していく歴史と言うことができる」とあるが、一方で本書は、消えていった文学の場を復元しようとするものでもある。これに対し、興膳宏『中国詩文の美学』（創文社）は、そのような場で行われた創作状況の復元を企図する。

興膳氏の研究の中心の一つが文学理論の研究にあることは、ここで指摘するまでもない。本書は、著者が解明してきた文学の「美」に関する原理が、詩文の形式の創出にどのように生かされていったかという問題を追究する。著者は「時間の流れを縦軸に、詩文の形式を横軸に取り、理念的・原理的な問題から個別的・具体的な問題へと、テーマを展開」（「はしがき」）したと言う。このため本書は、詩文における表現の美について、その完成された形を説明するのではなく、完成に至る道筋を丹念に追跡する。またこのような問題は詩が考察の対象とされることが多かったが、本書ではこの時期から唐前半にかけて詩と非常に近い美的意識をもって創作された散文、即ち駢文の技巧についてもその変遷が追究され、完成に至る様相を活写する。

本書で明らかにされたことは、『文心雕龍』が創作技法についても極めて重要な位置を占めていたということである。ことに第一章「創作技法論の展開」では、『文心雕龍』がその理論とともに、その後の詩文創作の技巧に深い影響を与えていたことを指摘する。『文心雕龍』を原点とし、『文鏡秘府論』を主要な資料に、この時期の技巧の模索に詳細な考察を加える。具体的には、対仗・典拠が精密になるのに加えて、六朝末から急速に声律の工夫が精密になること、四句が一つのまとまりとなる趨勢など極めて重要な指摘が、順を追って、かつ理論と実例が組み合わされて示される。

完成した形式に対して、完成にいたる過程を遡ってその経緯を跡づけることは難しい。本書の「律詩の形成過程」「五言八句詩の成長と永明詩人」は、句数の変化や文学創作の場を詳細に検討することで、近体詩完成の過程を明らかにする。特に、「四声八病か

ら平仄対応へ」は、『文鏡秘府論』に採録されている文学論を整理し、それが実際の作品においてどのように応用されているかを検証したもので、八病に始まった試行錯誤が近体詩へと収束してゆく様子が細密に論証されている。「杜甫と七言律詩」は、拗体などの技巧の面から杜甫における七言詩の意義を論じたもので、その試行を通して詩人杜甫の創作意識を掘り下げたものである。

本書の特色は、もちろん近体詩、そして駢文の技巧の発展完成の過程を解明した点に求められる。だが、以上のような表現の美を求める営為が個人としてよりも、集団の中で行われたことを考えると、試行と議論が行われた場、文学の場としての宮廷や宴席の役割を再認識することが必要となる。「遊宴詩序の演変」は、そのような文学の場について論じたもので、それが日本にも移植されたことを指摘する。

ここに紹介した2点は、共にこの時代において「集う」ということ、そのような場が文学の進展に果たした意義について問い直すことを促す。

この他に、三国志学会より3冊目の論集『狩野直禎先生米寿記念 三国志論集』（汲古書院）が刊行された（狩野先生は2017年2月にお亡くなりになった。謹んでご冥福をお祈りする）。三国時代の学術文化、また『三国志演義』と、三国をキーワードに研究者が集う会の論集らしく、文学に限らず内容は多岐に渡る。大上正美氏をはじめ、六朝学術学会に所属する研究者も論考を寄せておられる。この会も文学だけでなく、この時期に関心をもつ歴史・思想研究者が一堂に会して、学会誌の刊行や研究会の開催を行っている。もちろん宮廷でも文学作品創作の場でもないが、両学会のような総合的な学術の場の維持運営は、現在においてこそ必要なことではないだろうか。

なお、成田健太郎『中国中古の書学理論』（京都大学学術出版会）もこの時期を対象とするが、『六朝学術学会報』18（2017年）に道坂による書評があるので、参照いただきたい。（道坂昭廣）

三、隋・唐・五代

2016年の当該分野に関わる出来事としては、杜詩の訳注1種が節目を迎え、別の1種が刊行されたことが注目される。著者の没後30年以上を経て出版社を改め、編者の補筆を得て再び公刊され始めた吉川幸次郎著、興膳宏編『杜甫詩注』（岩波書店）は第5冊と第10冊が刊行されて、第1期全10冊が出揃った。その一方で下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注』全4巻（講談社学術文庫）が出版された。精装本10冊を費やしても成都滞在期（761年頃）までで、なお杜甫最晩年の詩に及ばないほど注の詳しい前者に比べて、後者は37名の研究者（編者2名を含む）が数年間で全詩に簡明な訳注を施し、用語・人物説明、年譜や全詩題索引などといった附録も充実させ、コンパクトな形で数箇月のうちに出版を終えている。依拠する底本が各々『宋本杜工部集』『杜詩詳注』である点も含めて、事々に対照的な両者だが、現時点で日本の杜詩研究が到達している水準の高さを示し、加えて今後における斯学の礎となる点で、異なるところはない。前者の第2期10冊が同じ編者の手によって、速やかに完成されることを望みたい。なお後者に対する齋藤希史氏の書評（『産経新聞』2016年11月27日朝刊）の他、両者に

関連する文章に同「漢文ノート 33 杜甫詩注」、安藤信廣「心豊かに杜甫に向き合う—『杜甫全詩訳注』登場の意味—」があって、それぞれ『UP』46-1 (2017年)、『東方』435 (同) に掲載されている。

詩文の長期にわたる訳注としては、岡村繁『白氏文集』12下 (明治書院新釈漢文大系) が刊行されており、完結まで第1巻と第13巻「索引」を残すのみとなった。第12巻下冊は『白氏文集』巻70・巻71と補遺上中下を対象とする。亡き著者の学統に連なる研究者らが執筆していることは、既刊の各冊に等しい。白居易については、白居易研究会編『白居易研究年報』17 (勉誠出版) が「特集 書蹟と絵画」と銘打って、彼の文学と書画との関係を扱う論考を複数収める。従来、文学研究者の視野にあまり入ってこなかったテーマを取り上げており、掲載された少なからぬ図版と相俟って、意欲的な試みと見受けられる。

この他、個別の文学者を主題とした研究書2点が刊行されている。道坂昭廣『『王勃集』と王勃文学研究』(研文出版)は「Ⅰ 王勃の文学とその周辺」「Ⅱ 日本伝存『王勃集』の意義」「Ⅲ 日本伝存『王勃集』をめぐる問題」の3部から成る。Ⅰが作家論・作品論であるのに対して、Ⅱ・ⅢではⅠと問題意識を共有しつつ、日本に伝わる『王勃集』の旧鈔本を主題にすえて、Ⅱでは鈔本を資料に用いて諸問題を分析し、Ⅲではそれらの鈔本がどう扱われてきたかを論じる。高橋未来『杜牧研究—杜牧における政治と文学—』(東京学芸大学出版会)もやはり「第1部 杜牧における「甘露の変」」「第2部 杜牧と牛李の党争」「第3部 杜牧の兵戦に関する思想と文学」の3部構成を取る。書名の副題や各部の表題を見るだけでも、著者の関心が杜牧と政治との関わりに在ることは明白だろう。政治・軍事との関係と共に、詩文だけではなく、『注孫子』などの思想関連の著作をも詳しく分析する点は、同書が文学の専門家による杜牧の研究に新しい視座を提示したものと評価できよう。これら両書は著者の世代差を反映して、原型となる論文が著された時期は、必ずしも等しくない。また訳注や校勘を除いて日本人が王勃を対象に著した研究書の嚆矢となる前者と既に数種の専著が日本でも世に問われている杜牧を扱った後者とは、研究史における位置づけも違って来る。しかし、主題とする文学者を彼らが生きた時代、つまり初唐や晩唐の中に置いて理解しようとする方法論には、相通じる姿勢が感じられる。

詩歌を除く韻文の訳注としては、雑誌『風絮』の別冊でもある龍榆生編選、日本詞曲学会編集『唐宋名家詞選』唐五代編 (日本詞曲学会) を挙げておきたい。同書は『風絮』誌の方で第1号 (2005年) から第12号 (2015年) までほぼ毎号にわたって掲載されてきた『唐宋名家詞選』所収作品の訳注について、未掲載の108首 (訳注者は15名に及ぶ) に関わる分を収録する。『風絮』本誌の連載と併せれば、唐・五代の主だった詞の翻訳・注解や作者の履歴を通覧できる。将来、両者をまとめた単行本が出版されて、より簡便にそれらが利用できることを期待したい。

伝統的な詩文から唐以降に特有のジャンルに目を転じると、葉山恭江『唐代伝奇を語る語り手—物語の時間と空間—』(汲古書院) が2016年の成果に数えられる。ジュネット (Gérard Genette) が示す「物語の言説の研究」などを援用した著者の分析は、伝奇

のそう意識されていない側面をいくつか示し得ている。「第1部 理論篇」、「第2部 実践篇」の前後に置かれた「序論」（「第2章 日本における唐代伝奇研究の現状と課題」）や「付録 唐代伝奇関係研究文献目録（日本編 2000～2014年）」も有用である。唐代伝奇とも関係の深い作品に、仏教説話が存在する。高山寺監修、石塚晴通編、赤尾栄慶解説『国宝 冥報記』全3巻（勉誠出版）は代表的な仏教説話集の現存する最も古い写本の複製である。唐代（7～8世紀）の巻子を忠実に再現した同書は、今後の説話研究に資するところがあるだろう。

最後にユニークな研究書として、小高修司『唐代文人疾病攷』（知泉書館）を挙げておく。同書は白居易・杜甫・李商隠・柳宗元・温庭筠・蘇軾の疾病と養生について考証した論文を順に収めるが、著者が医師であるだけに論旨には参考になる部分がある。

（永田知之）

四、宋

宋代文学研究者にとって、2016年は学術誌『橄欖』（宋代詩文研究会）が幕を下ろした年として永く記憶されるだろう。1988年の創刊以来、およそ28年を経て、毎号、国内外の学者による論考を数多く掲載し、日本の宋代文学研究を牽引してきた功績は計り知れない。Vol.20「停刊記念号」附録の「宋代詩文研究会の歩み」「編集後記で迎える『橄欖』の四半世紀」「『橄欖』総目次 vol.1-19」を通覧すれば、大学院生による早大宋詩研究班を母体とした草創期から今に至るまでの学術貢献の道りを窺い知ることができる。内山精也氏をはじめとする編集部の長年の尽力に対し、この場を借りて深甚なる敬意を寄せたい。

『橄欖』とその刊行主体である宋代詩文研究会を発展的に引き継ぐかたちで、2013年、日本宋代文学学会が新たに設立された。『日本宋代文学学会報』はすでに第3集を数え、いわば『橄欖』以後の世代にあたる研究者たちが新たなプラットフォームで活躍しつつある。甲斐雄一『南宋の文人と出版文化—王十朋と陸游をめぐる—』（九州大学出版会）はそうした三十代の新鋭による成果であり、『王状元集百家注東坡先生詩』の編者に仮託された王十朋、および『劔南詩稿』で名高い陸游の二人を主たる論述対象とする。王・陸ともに南宋の文人官僚であるが、本書の独創的なところは、文人官僚の周辺で活動する「中間層文人」（地方郷村社会の読書人や科挙に失敗した下第文人など）にも注目し、彼らが編集・出版を通して文学作品の流通にいかに関与したかを読者論的に解明した点にある。たとえば福建建陽の出版業が利用した「王状元」という商標の背景には王十朋の名声にもとづく三層構造の評価があったこと、陸游と四川の在地文人の交流において憂国の情と元祐党人に対する尊崇の念が共有されていたことなど、興味深い見解が少なくない。引用詩文の訓読や注釈にいくつか不備がある点は惜しまれるが、白璧の微瑕と言うべきか。

砂山稔『赤壁と碧城—唐宋の文人と道教—』（汲古書院）は、唐代の王維・李白・杜甫・韓愈・柳宗元・李商隠、北宋の歐陽脩・曾鞏・王安石および三蘇などの文人と道教との関わりを考察したもの。道教学者の砂山氏にはすでに『隋唐道教思想史研究』（平

河出版社、1990年）があり、本書はその続篇として、さらに宋代にまで視野を拡大する。真宗や徽宗ら北宋の皇帝が熱狂的に道教を信奉したことはよく知られるが、著者によれば、唐代における「道教と老子と『道德経』の三位一体的関係」とは異なり、宋代道教になると黄帝尊重、太一信仰、三元思想などの新たな様相を呈するという。それが当時の文人たちの創作にも反映しており、たとえば蘇軾の「雪堂記」、前・後「赤壁賦」は三元日（上元・中元・下元）や玉皇大帝崇拜を強く意識したものであると指摘する。

唐代文学に比べて、宋代文学と道教に関する研究は必ずしも進展しておらず、個別の詩人を対象とした鍾来因『蘇軾与道家道教』（台湾学生書局、1990年）、最近の総合的な成果である張振謙『道教文化与宋代詩歌』（人民文学出版社、2015年）など、数点が挙げられる程度。砂山氏の書はまさに日本における先駆的な業績と言ってよいが、これをきっかけに文学研究の立場からの応答を期待したい。特に道教的表現に即した詩賦作品の読み直しなど、さらなる探究の余地がありそうである。（緑川英樹）

五、金・元・明、清

金から清にいたる時代の文学といえば、白話文学が中心となることは言うまでもない。本年は特にこの分野において、1月に田仲一成『中国鎮魂演劇研究』（東京大学出版会）が、3月には井口千雪『三国志演義成立史の研究』（汲古書院）、そして11月に小松謙『中国白話文学研究—演劇と小説の関わりから—』（汲古書院）と、重要な著述が相継いで公刊された。極めて実り多い1年であったと言ってよいであろう。以下、これらの著作を中心に、刊行時期を追って概観することとする。

まず、田仲一成『中国鎮魂演劇研究』は、田仲氏による『中国祭祀演劇研究』（1981年）、『中国の宗族と演劇』（1985年）、『中国郷村祭祀研究』（1989年）、『中国巫系演劇研究』（1993年）という一連の中国祭祀演劇研究の完結篇と位置づけられる。これら祭祀演劇の経脈を論ずる氏の手法は、1980年代から30年以上にわたる実地調査と膨大な文献収集を行い、それらを綿密に読解することによるもので、大きな説得力を有する。

本書で取り上げられるのは、横死を遂げた人々の鎮魂のために演じられる祭祀演劇、「目連戯」である。その地域間差異が詳細に論じられた後、議論はさらに村落祭祀と大宗族の儀礼間で、使用テキストと上演形態に如何なる異同が存在するかという問題へと展開する。例えば、従来「京本」と尊重されていた鄭之振による目連戯テキストが、実際は彼の出身地（徽州祁門）を含む村落祭祀では上演の実態が無く、寧ろ湖南や四川などの遠隔地、しかも儒教的倫理が強く働く宗族儀礼の場が、主たる上演の場であったことが指摘され、テキスト伝承の多面性が明らかにされる。また、氏が「市場地」と呼ぶ商人の介在する上演空間においては、目連戯に滑稽味や独自の登場人物など娯楽的要素が加わること（花目連）や、上演時間の延長に応じ、「梁武帝伝」「西遊記」「封神伝」などを増加した台本（連台本）が生まれる過程も、演目の比較検討によって明らかにされる。折子戯の誕生を論ずる章とあわせ、今後、演劇テキストの変容を分析する上で、氏の成果は繰り返し参照されることとなるであろう。

このように、氏の「文献解説と野外調査の成果を相互に参照する」方法論によって導

かれる結論は、一つ一つ重みをもって読者に迫り、その力強さには圧倒される思いを抱く。本年、この成果を享受することのできた我々は幸せである。なお、氏が35年間の野外調査において撮影された、35,000枚にも及ぶカラー写真と動画は、本書公刊を機に東洋文庫Webサイトにて公開され、極めて貴重な原資料アーカイブとなっている。詳しくは当該サイトを参照されたい。

井口千雪『三国志演義成立史の研究』は、『三国志演義』の成立に歴史書がいかに利用されたかを、各種版本間の緻密な比較検討を通して浮き彫りにする。本書を貫く方法論の基本は、徹頭徹尾テキスト間の綿密で根気強い校訂作業と読解にある。これまで比較的古い版本と見なされてきた嘉靖壬午序本「序」の、「修髯子」という署名が武定侯郭勛のものである可能性を論ずる過程は、謎解きのように鮮やかである。そこから、嘉靖壬午序本が実は「読み物」として文章を洗練させることを目指した、最も新しい位相を示すテキストであること、その背景に見える人間模様をも明らかにされる。そして、他の重要テキストとしては、葉逢春本が極めて原演義に近いテキストであることや、劉龍田本が、嘉靖壬午序本と祖本を同じくする簡略版であることも、同様の綿密な本文分析によって導き出される。氏の今後の仕事が大いに楽しみになる力作であった。

さて、小松謙氏の待望の新刊『中国白話文学研究—演劇と小説の関わりから—』である。本書は標題にある通り、「演劇と小説の関係」から「白話文学」を論ずるのだが、ここで氏がいう「関係」とは、相対する二者間の関係ばかりを意味するのではない。むしろ氏の関心の根底にあるのは、両者の連続性である。金元の時代に「曲」が勃興し、明清期に小説が商業出版物として人気を博す、各時代の歴史的背景を踏まえた上で、書物の提供者である作者と本屋、読者層が希求するコンテンツ、これらの相互作用という論点から、テキスト形成の過程・出版物としての形状分析が展開する。同時に、この論点が有効に成立するのがこの時代の特徴であることも、小松氏の議論から教えられる。特筆すべきは、巨大テキスト『三国志演義』『水滸伝』が見せる人物造型上の綻びを見逃さず、その綻びから関連演劇の、或いは傍系テキストの影響を突き止める氏の手腕で、ここから、小松氏が常に目の前のテキストをまず全体として読み解き、物語を楽しむことから研究を始めておられることを印象づける。例えば、『水滸伝』の原型を論ずる中で、人気のキャラクター林冲の造型に出現する矛盾を、明代の演劇『宝剣記』における造型を手がかりに論ずるくだりなどは、その典型であろう。

本書によって浮き彫りにされるのは、白話文学のテキストが、機に応じて変容を遂げる実態である。それは、小説や演劇といった、近代的文学ジャンルを超えた普遍的な本質である。かくして氏は、演劇も小説も、「白話」で書かれた読み物として出版された時点で、受容側にとってはジャンル間の違いは無かったと述べるのである。この「白話」が有する創作空間の捉え方は、今後十分に参照されねばならないであろう。

また、阿部泰記『宣講による民衆教化に関する研究』（汲古書院）も、白話テキストを有して、説唱芸能に準ずる形態で演じられる「宣講」論として、「白話文学」研究の一環に位置づけることが可能である。白話小説や演劇と異なるのは、テキストに基づいて演じられる語りや、主として文字を知らない一般大衆に向けたものであったため、

「読み物」として娯楽対象とはならなかったという点である。そこにこの「宣講」テキストの面白さと難しさがある。筆者は、従来「擬話本」と単純に白話文学の一種と位置づけられていた『躋春台』のテキスト分析を通して、それが「聖諭宣講」という独自のジャンルとして位置づけうることを指摘する。そして「聖諭宣講」が儀式を伴った独自の上演形態を有して、説唱芸能や因果応報物語などの隣接ジャンルと接触しつつ、空間的かつ時間的に変容を遂げるあり様を詳細に明らかにする。「宣講」は、地方統治と郷民教化の目的で宋代以降制度化された「郷約」秩序の中で、土地の方言を織り交ぜながら大衆に向かって語り演じられるのだが、「宣講」の中心地の一つであった四川で編まれた『宣講集要』には、四川方言を反映するテキストが残されているという指摘は興味深い。かつて四川出身の郭沫若は、その自伝「我的童年」(『沫若自伝』第一巻「少年時代」)で、鳴り物や声色をふんだんに盛り込んで娯楽化した「宣講」を紹介して、「よく弾詞に似ていたが、完全に弾詞そっくりというわけでもない(很像弾詞, 但又不及像弾詞)」と称している。本書で詳述される「物語化」した「宣講」テキストを読むと、その語りの様はかくや、と想像がかき立てられる。このような「宣講」テキストを、評者はかつて小説や演義での「白話文」ではなく「官話文体」と呼びうるものと論じたことがあるが(『「聖諭」宣講—教化のためのことば—』『中国文学報』66、2003年)、耳によって享受されるこれらテキストを、広い意味で「白話文学」に列なるものと位置づけるなら、いよいよ白話文学研究の裾野の広さを感じずにはいられない。

さて、小松謙氏の主張を借りるなら、演劇や小説などを内包する白話文学と、本当の意味で相対する文言、しかも小説を取り扱った専著も本期に公刊された。中野清『中国怪異譚の研究—文言小説の世界—』(研文出版)で、氏のこれまで発表してきた袁枚『子不語』研究がその中心となっており、『子不語』に収録される作品による執筆態度の相違や、取材後に袁枚自身が加えた潤色の程度など、作品ごとに個別の特徴が存在することが論じられる。白話文学が商業出版される過程で、本屋と作者、さらに読者を交えた三つ巴の関係の中で、多様な変貌を遂げたことは、上述の小松氏そして井口氏を含む、従来の先行研究により明らかになりつつあるが、文言小説においていかなる事情が存在したのか、今後さらなる研究の進展を期待したい。(木津祐子)

六、近現代

2016年は、中国近現代文学の起点とされる文学革命から99年、文化大革命の開始から50年にあたる。この年の収穫として、まず張競・村田雄二郎編『日中の120年 文芸・評論作品選』全5巻(岩波書店)を挙げておきたい。各巻は「共和の夢 膨張の野望 1894-1924」「敵か友か 1925-1936」「侮中と抗日 1937-1944」「断交と連帯 1945-1971」「蜜月と軋み 1972-」と題し、日中双方の知識人が相手国について書いた文章を年代順に選んで収める。120年間の両国の文献から選ぶだけでなく、中国語の著作を日本語訳し、さらに巻末には各篇の解説を付する作業量は大いにたいへんなものである。このアンソロジーが収めるのは、批評・旅行記・論説をはじめ広い範囲にわたり、必ずしも文学関係に限られないが、意義ある出版として特筆しておきたい。このほか宮終二の

短歌や駒田信二の小説などと挙げていけば、量はとうてい5巻ではすまなくなるだろう。

研究書の多くは、著者の長期にわたる研鑽の蓄積をまとめた成果であった。これらを読むと、国民革命・抗日戦争・延安整風運動・国共内戦・胡風批判・反右派闘争・文化大革命・「六四」と続く中国現代史上の政治的動きが、いかに中国近現代文学と切り離せないかが強く感じられる。関根謙『抵抗の文学—国民革命軍将校阿壠の文学と生涯』（慶應義塾大学出版会）は、胡風批判に連座して1955年に冤罪で投獄された詩人阿壠（本名は陳守梅、1907-1967）につき、現在入手しうる資料と関係者へのインタビュー、実地調査記録を駆使して書かれた評伝で、著者の気迫と状況への憤りを感じさせる。同時代の中国人として南京陥落および虐殺を描いたほぼ唯一の文学作品だと思われる阿壠「南京」（1939年）の出版を国民党が認めなかった背景についての著者の推論は説得的である。楠原俊代『韋君宜研究 記憶のなかの中国革命』（中国書店）は、前半部に人民文学出版社社長を務めた韋君宜（1917-2002）が、延安から文化大革命に及ぶ政治運動に翻弄された当事者としての回想をまとめた『思痛録』を全訳し（北京版・香港版の異同を明示）、後半部は韋君宜の各種著作によりながら、1930年代以降のいくつかの時期における問題を論じる構成になっている。書評は『東方』437（土屋昌明）。小山三郎『中国近現代作家の政治—批判と粛清の文学史』（晃洋書房）は、同著者『現代中国の政治と文学—批判と粛清の文学史』（東方書店、1993年）の改題復刊。

作家たちが、時代の中でどのように作品・作風を作りあげていったかを時間軸を追って系統的に論じた書物としては、河村昌子『巴金—その文学を貫くもの』（中国文庫）、松村志乃『王安憶論 ある上海女性作家の精神史』（中国書店）、森岡優紀『歴史の周縁から 先鋒派作家格非、蘇童、余華の小説論』（東方書店）の3点を挙げておく。河村は、巴金の小説のうち『激流』、『電』、『火』第三部、『寒夜』、妻への回想に焦点をしばり、作家生活のそれぞれの段階に各作品を位置づける。『激流』については、新聞連載時の掲載紙『時報』の報道と小説がいかに関わるかをていねいに追いかけている。松村は、1954年生まれ作家王安憶の1980年代、1990年代前期、1990年代後期の作品6点を通して、文化大革命の終息、第二次天安門事件、上海の経済発展といった転換点の文学テキストへの影響を指摘する。森岡は、1960年に生まれて文化大革命を「周縁」で傍観した経験をもつ3人の作家をとりあげ、彼らの世代が五四時期以来の近代文学の終わり、新しい文学の始まりであるゆえんを、小説の分析を通じて示そうとした。これらのほかに、湯山トミ子『現在に生きる魯迅像 ジェンダー・権力・民衆の時代に向けて』（東方書店）、中井政喜『魯迅後期試探』（名古屋外国語大学出版会）が刊行されている。

作品を対象として論じた力作としては、秋吉收『魯迅 野草と雑草』（九州大学出版会）がある。秋吉は、魯迅の散文詩集『野草』の題名が日本語「雑草」に相当することを具体的に示したのち、『野草』の個々の作品が、いかに徐玉諾（1894-1958）の詩や日本文学の先行作品に多くを負っているかを、驚くほど詳細に跡づけている。もし「少しく誇張しているなら、いわゆる明治大正文化なるものはほとんど西欧からの剽窃文化であるともいえる」（林達夫）という先人の指摘を借りるなら、魯迅による模倣はまさし

く日本から明治大正文学の骨法を得たのだ、と言い換えてもよいであろうか。巻末に秋吉による新訳『雑草』を付す。書評は『東方』435（吉田富夫）。

演劇に関するものとしては、瀬戸宏『中国のシェイクスピア』（松本工房）がある。本書は、中国・台湾・香港におけるシェイクスピア受容史を、原典翻訳史の域を超え、1844年から2015年に至るまでの公演の質的变化を通じてたどっており、特に1930年（上海）、1937年（上海と南京）、1942年（四川）、1986年（昆劇と越劇）、1990年（北京）の7公演を注目すべきものとしてとりあげる。

共同研究の成果報告書としては2点。関根謙編『近代中国 その表象と現実 女性・戦争・民俗文化』（平凡社）は、慶應義塾大学東アジア研究所で取り組まれた共同研究の成果報告であり、序を含め12篇からなる。文学については松倉梨恵「日記体小説に描かれる女性同士の愛—盧隱「麗石の日記」論」、長堀祐造「魯迅とゾルゲとの距離—表象としてのスパイ及び「上海文藝の一瞥」講演の謎」、関根謙「路翎戯曲『雲雀』の登場人物をめぐる一内戦時期知識人の表象」、橋本陽介「中国における「魔術的リアリズム」の文体—莫言『赤い高粱』を中心に」の4論文、ほかに映画関係2論文を含む。なお「リアリズム」については、福嶋亮大『厄介な遺産 日本近代文学と演劇の想像力』（青土社）にも、「今日でも、バフチンの言う「グロテスク・リアリズム」は中国人作家（莫言、余華、閻連科……）にとって強力な武器となっているのに対して、日本文学はこの種の大地と結びついたカーニヴァルの身体をもたない」という興味深いコメントがあることを付け加えておこう。つぎに高綱博文・石川照子・竹松良明・大橋毅彦編『戦時上海のメディア—文化的ポリティクスの視座から』（研文出版）は、2011～2015年にかけての共同研究の成果論文15篇で、「戦時期（1937～45年）上海において刊行されていた邦文・中文・欧文の新聞・雑誌メディア」や映画を検証し、意識的に「〈侵略と抵抗〉の二元論的論理で把握できない〈グレーゾーン〉」を研究課題とした。

さて、本年の研究書を見ていて、いくつか感想をもった。第一に、研究対象である同時代の中国作家・知識人が、状況に迫られて闕語法を選ばざるを得ないでいるとき、外部の者がその楽屋内を他人事としてあからさまに書くのはむずかしい。その場合、公刊されている主流の研究に倚りかかる安全地帯を選ぶべきなのだろうか、闕語法を重ねた研究として著すべきなのだろうか。第二に、先行研究として中国語・日本語の著作のみが挙げられていることが多い。一例を示すなら、アメリカの研究誌 *Modern Chinese Literature and Culture* と日本の学界とは、相互に全く関心を持っていないように見える。第三に、語学の研究者の立場からすると、作品の引用箇所を現代中国語原典とつき合わせてみて、誤読・誤訳しているのではないか、文法の知識が充分なのだろうかと不安を感じさせられることがときどきある。このうち第三点は、容易に克服が可能なはずである。

（平田昌司）

七、日本漢文学

佐藤道生『句題詩論考 王朝漢詩とは何ぞや』（勉誠出版）は、平安時代の貴族たちの宴席における漢詩創作の作法について論じる。本書は題名のように特に〈句題詩〉に

注目して論じる。句題詩は日本において独特の発展を遂げた。作詩にあたって、多用かつ適切な典拠の運用が要請された。それは技巧と呼ぶよりはむしろ厳格な作法と言うべきかもしれない。佐藤氏は句題詩の洗練が、次第に和歌に近づいてゆき、詩と歌の境界が低くなってゆくとする。しかし一方で句題の選択には、唐代の省試の出題からの影響が見られるとされるので、日本の宮廷は、中国における文学評価基準を継承しつつ、その表現をより精密化する方向に向かったのだ。本書からは、文学の場としての宮廷の役割が日中両国で変化しつつあったことが感じられる。興膳宏『中国詩文の美学』（創文社）所収の「遊宴詩序の演変」では、文学の場が日本に輸入されたことが紹介されているが、佐藤氏の著作は、日本におけるその後の展開として読むことが可能である。

この項ではもう1点、澤井啓一・岡本光生・相原耕作・高山大毅訳『徂徠集 序類1』（平凡社東洋文庫）を紹介する。荻生徂徠は古文辞の提唱者として毀誉相半ばする人物であるが、古文辞の移入が作詩文人口増加に寄与したことは間違いない。本訳注は徂徠という人物の全体像と漢学者としての成長を見るのに最適なジャンルとして「序」を選んだという。そのため「序」作品を送られた人物に関する注は詳細で、訳注者の意図通り徂徠とその時代を映し出すものになった。時代は大きく隔たるが、両書から文学創作の場が融解し、選ばれた人々が集うサロンから、一定の学力を持っていれば参加可能なサークルに移っていたことが理解されるのである。（道坂昭廣）

八、書誌学

まず本項の表題に掲げた「書誌学」を標榜する著作として、高橋智『海を渡ってきた漢籍—江戸の書誌学入門』（日外アソシエーツ）に触れておこう。図書館サポートフォーラムシリーズの一つとして刊行された同書は、江戸時代の図書に関するレファレンスたることを目的として書かれている。著者の専門の中でもとりわけ造詣の深い四書に概ね題材を絞ってはいるが、近世の日本人が漢籍とどう関わっていたかを知る上で興味あふれる内容になっている。これとは対照的に西脇常記『中国古典時代の文書の世界—トルファン文書の整理と研究—』（知泉書館）は、ごく専門性の高い論文集と言える。3部構成の中で「Ⅰ トルファン出土漢語大蔵経の版本について」「Ⅲ 雑纂」に挟まれた「Ⅱ トルファン漢語文書の目録と論集」は、特にそうである。中国思想史を専攻する研究者の手に成る所収論文は、いずれも近年に発表されており、トルファン学の最先端に位置していよう。

他に程千帆・徐有富著、向嶋成美・大橋賢一・樋口泰裕・渡邊大訳『中国古典学への招待—目録学入門』（研文出版）が、研文選書の1冊として刊行された。既に名著の誉れが高い『校讐広義』目録篇（底本は齐鲁書社1998年版）の全訳だが、大学紀要掲載時のそれを大幅に加筆修正した訳文、並びに訳書独自の「目録学要籍解題」「目録学年表」のいずれも価値が高い。程・徐両氏は師弟だが、訳者も向嶋氏とその受業生から成っており、目録学の意義を説く書物を世に出す熱意が共に世代を超えて継承されたことは奇縁であろう。（永田知之）